4月の短歌

渡邉麗加

今から50年以上前の丁度今頃・・・・・
私は農業高校を卒業した。
ガリ版刷りにした一冊の歌集を初恋の人に手渡し、卒業するつもりだったのに、手渡す勇気がないまま、父母との農業の道へと進んでいった。
田畑の行き帰り、はだしの足に道芝の砂利が痛かった・・・・・。
そして私は高知県の私と同じ名前を持つ青年と文通を始めた。
長く丁寧な文章を書くみかん農家の青年だった。
わずか二年間であったが・・・生意気だった私に
誠実さこそが人の心を動かすという事を教えてくれた人でもあった。
その後私は縁あって初恋の人と結婚した。
そして50年・・・・
昨年、私は「遠き麦笛」という歌集を上梓した。
その本を前に・・・・・
やわらかくつきあげてくるもの・・・・・。
ふと私はこの本をあの二十歳の日のペンフレンドに送ろうと思った。
生きていてくれたなら・・・・
間に合ったなら・・・・・

① 二十歳より沙汰なく生き来し君に送る
歌集は終の我が言葉とす

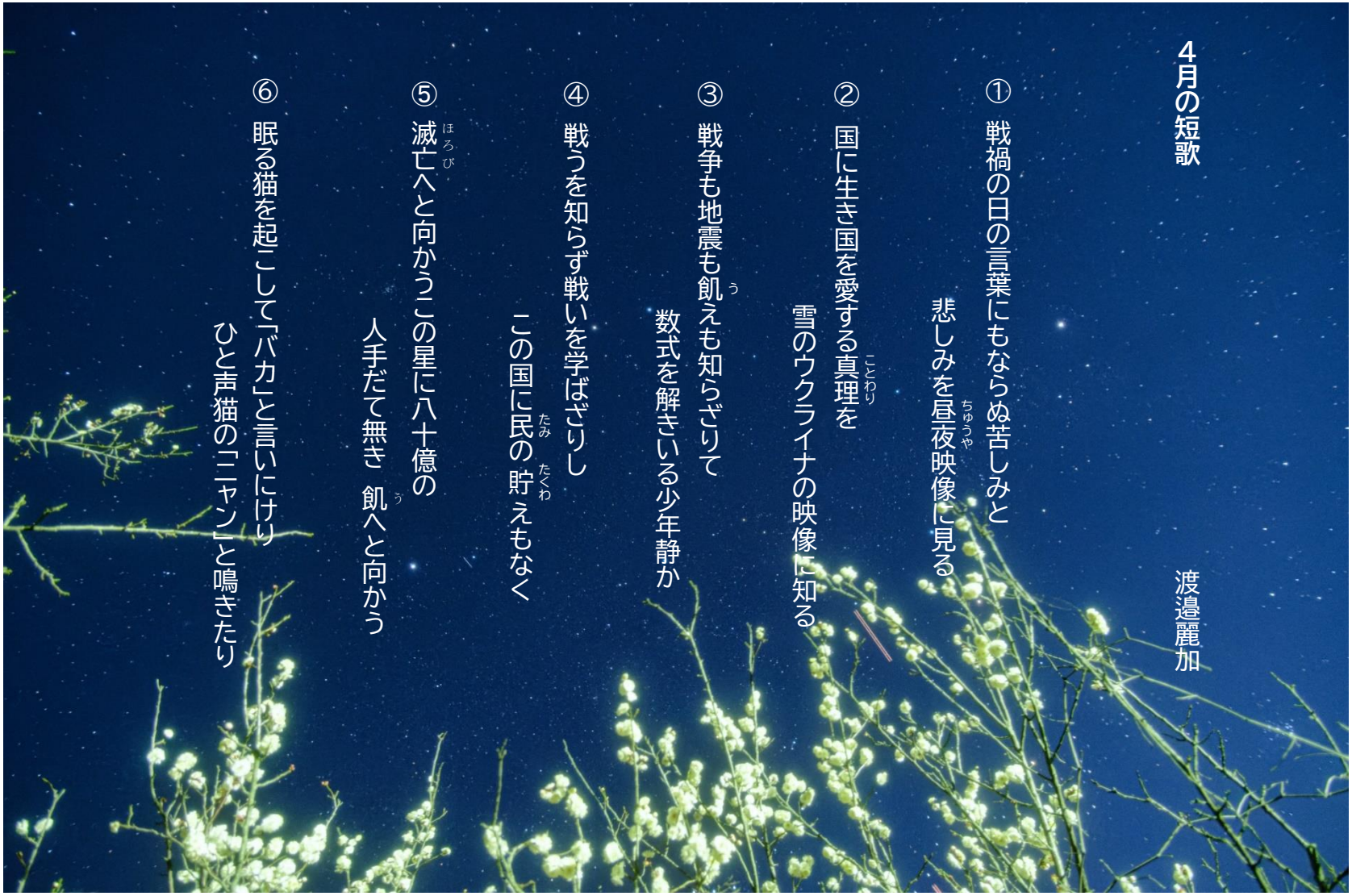
② 耳元で息づくごとくに聞こえ来て
海を隔てしその声やさし

③ 海の陽をあびて育ちしとう水仙の
包みほどけば君の香のする

④ 五十年経てかわす手紙の震え字に
抱き合うごときよ君のぬくもり

⑤ 海を隔て互いに今を生きいると
確かめる短き震え字を読む

⑥ 細りゆく命の痛みにふれもせで
春の海鳴りを伝え来る文字



4月の短歌

渡邉麗加

① 戦禍の日の言葉にもならぬ苦しみと
悲しみを昼夜映像に見る

② 国に生き国を愛する真理を
雪のウクライナの映像に知る

③ 戦争も地震も飢えも知らざりて
数式を解きいる少年静か

④ 戦うを知らず戦いを学ばざりし
この国に民の貯えもなく

⑤ 滅亡へと向かうこの星に八十億の
人手だて無き 飢へと向かう

⑥ 眠る猫を起こして「バカ」と言いにけり
ひと声猫の「ニャン」と鳴きたり